

平成23年(2011)12月15日

編集・発行
書学書道史学会
会報委員会

東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031美術新聞社内
TEL(03)3462-5251
FAX(03)3464-8521

第二十二回書学書道史学会大会を終えて

澤田 雅弘

十一月十二日(土)・十三日(日)の両日、第二十二回大会を大東文化大学板橋校舎で開催しました。第四回に続いて二度目です。第十五回の東京大学における大会二日目のシンポジウムも、本学で開催しましたが、現教員大会スタッフは、後者のシンポジウム開催経験者二名を除けば初めての経験でした。しかし、専門の学科・大学院専攻科を抱える利点から、陣容について不安なく準備を進めることができました。特別鑑賞会の品目選定や展示は、博物館・美術館経験が豊富な安達達哉・高橋利郎両氏にお任せし、書道研究所の藤森大雅氏ならび同研究所職員の協力を得ました。またスタッフの配置等は河内利治氏に、懇親会は高城弘一氏にそれぞれ一任し、私はそのほかの総務一般を担当しました。

唯一の気掛かりといえは、学会設立当初から事務局を切り盛りされ、大会の事務局側準備も一手に担ってこられた菅原前事務局長の定年退任後の二年目に当たったこと、すなわち、見習い期間を終えた新事務局体制が本格的に始動する年度と重なったことでした。この不安は、横田国内局長から伝えられた「大会マニュアルを残してほしい」の一語に象徴的です。大会準備を進めてはじ

て分かったことは、事務局・国内局・開催校三者の分担内容が互いに不明確であったことで、直前に大慌てすることもありました。この分掌の整理は、来年の大会開催までに改善しなければならぬことでしょう。参加者におかれても、恐らく不便をお感じになったこともお有りと思います。紙面を借りてご海容のほどお願い申し上げます。

大会参加者は予想をやや下回る一三三名でしたが、懇親会参加者は八十余名のほり、随所で学問論議が交わされる有意義な時間であったように見受けられました。

この報告文を書き始めた日、奇しくも記念集合写真が届きました。学会創設期、隅に畏まっていた私を含む当初の幹事たちが、すっかり様形を変えて中央前列に写るようになっていたのを見、時の過ぎゆく速さとともに、責任の重さを痛感しました。

うれしいことがありました。自慢話のようになりませんが、少しおしゃべりします。大会を本学で開催することは、キャンパスが埼玉にある一・二年には話しませんでした。しかし、学会ホームページで知った二年生の一部が、自分たちも拝聴することができるのでしようかと尋ねてきたのです。事務局に話を聞き、希望者名簿を提出させて許可したところ、両日にわたる発表の全てを聞き終えた彼らが、閉会直後に「来年もぜひ」と願い出てきたのです。「来年は別府大学だよ」「承知しています」「ならば会員同伴者として連れて行きましょう」と会話しながら、学科生に書学が浸透しつつある喜びとともに、彼らが本学会を支える次世代の一員になることを確信して、心強く感じたことでした。

最後に、スタッフの院生(会員)の氏名を記して、その奮闘を労いたいとおもいます。

角田健一・根本知・亀澤孝幸・高峰・宮澤寛順・亀山麻理・加藤雄平・吉田崇
・三村隼外・市川のぞみ・伊藤夕姫・野中直之・川本茜・鍋倉翔織・内記智仁
・岡部容枝・渡邊亮太・三澤真帆・廣田ゆう・伊雄暉・ほか学科生六名

第7回「学生・若手の会員による研究発表会」報告

(国内局)

平成23年6月26日(日) 13時30分より、跡見学園女子大学において、およそ70名の参加者を得て、第7回研究発表会が開催された。内容は、前半が3名の大学院生による「研究発表」、後半が「パフォーマンス書道の歴史とあり方」をめぐる座談会という2部構成で行われた。

【研究発表】

①書道教育における理想の平仮名字形「ふ」を中心として

京都大学大学院博士後期課程 北山聡佳

本発表は、文字教育における平仮名、特に「ふ」の字形の変遷を分析し、理想の「ふ」とはどのようなものか検証したもので、現行の教科書を考察し、「ふ」の字形を比較・分析したり、文部省設立後の明治検定教科書から現在の検定教科書に至るまでの「ふ」の変遷を概観したりした内容であった。最後に書写教育における理想の「ふ」の字形が提示されたが、質疑応答では、立論の方法について再考すべきことが指摘された。

②張廷済と米芾

佛敎大学大学院博士後期課程 川合尚子

「主として学生・若手の会員に発表の場を与え、研究の活性化と研究者の育成を図る」という目的で開催している研究発表会の発表者を公募します。前々回の研究発表会から、発表のあと座談会形式で参加者相互に書をめぐって意見交換をする場を設けています。第8回の発表会も同様な方法で進めたいと思います。

日 時 平成24年6月24日(日)

午後1時〜5時

本発表は、清代の金石学者・文物収集家として知られた張廷済が、米芾の書を学んだだけでなく、米芾の生き方や思想にも共感したこと、そして彼が米芾をどのように受け止めたかを遺墨集『清儀老人遺墨』をもとに探ったものであった。質疑応答では、「米芾の思想」というがそれはどのようなものか?という質問や、「伝記史料」の典拠をきちんと示すべきだという指摘が出された。

はじめに、3人の話題提供者(笠嶋忠幸常任理事・大橋修一理事長・石井健幹事)から、それぞれ「パフォーマンス書道の歴史とあり方」に関して話題提供してもらい、その後、座談会形式で意見交換した。笠嶋氏は主として、日本の中世以降に見られるパフォーマンス書道について、大橋氏は「中唐以後の評論の動向」について、石井氏は寺子屋席書や明治〜昭和の書道家のパフォーマンス、「空海にまつわる説話」など、それぞれが専門分野を生かして話題を提供した。

③張懷瓘書論の射聲
大東文化大学大学院博士後期課程 亀澤孝幸
本発表は、豊富な著作を残した論書家である張懷瓘の書論について考察したものである。書の存在論は独自の価値根拠を与える理論として透徹したものだとし、その企図はどこにあつたか、書という芸術において、文学に比肩しうる価値を与えようとしたのではなかったかといふ、張懷瓘の独自の書の哲学に着目した考察であつた。文献に広く目配りし、そこから一つの見解を導き出したと思われ。

座談会では、現在ブームとなっている「パフォーマンス書道」に対して、「部のアピールになる・アジアブームの再来・迫力がある・団体で絆を感じられる」など、肯定的な意見が多かつた。一方、「ブーム＝一過性ではないか・書の技術とどう関わるかは別問題・男子の姿が見えない」など、現状における不満や将来に対するややシビアな意見も出された。議論が活発になったときには、時間の関係で収束せざるを得ず、やや消化不良の感は否めないであろう。次回、座談会形式を取り入れる場合はゆとりある時間配分が望まれる。

【パフォーマンス書道の歴史とあり方」をめぐる座談会】

第8回「学生・若手の会員による研究発表会」発表者公募について

(国内局)

会 場 東京都内の大学(場所未定)

内 容 ①若手研究発表2名〜3名(公募)

②座談会形式の意見交換会

内容については、次回の会報および学会HPでお知らせします。

【若手研究発表に関して(公募)】

公募対象 満35歳以下、または大学院在籍者に限る。

発表時間 1人20分、質疑応答10分、合計30分。

締め切り 平成24年2月20日(月)

応募方法 パワーポイントなどの機器使用可。

電子メール。表題を「研究発表の応募」とし、住所・氏名・所属を明記し、発表内容の題目と要約(レジュメ)をワード

文書で添付すること。文字数は500〜600字。

跡見学園女子大学(横田恭三宛)

yoikota@atomi.ac.jp

第8回「会員のための鑑賞セミナー」開催のお知らせ

(国内局)

第8回となる「会員のための鑑賞セミナー」を以下の要領により、開催します。ふるってご参加下さい。

また、今回は特別解説として高城弘一氏(大東文化大学准教授・本学会理事)と水田至摩子氏(畠山記念館学芸課長・本学会員)の二名による作品解説を行います。

日 時 平成24年3月3日(土)

午後3時～5時

場 所 東京・出光美術館(東京都千代田区丸の内

3・1・1帝劇ビル9階)

交通 JR「有楽町」駅 国際フォーラム口より

徒歩5分。東京メトロ日比谷線・千代田線

／都営三田線「日比谷」駅(出口・B3)、

東京メトロ有楽町線「有楽町」駅(出口・

D1)、いずれも帝劇方面出口より徒歩3分。

集 合 美術館内に午後3時集合。定刻になりましたら、館内放送にて呼び出しいたします。

※なお、入場する際には、各自、企画展の入館料をお支払いください。

内 容 企画展(古筆手鑑 国宝『見努世友』と『藻塩草』)に合わせた解説・見学

時 程 15:00～解説(レクチャールーム)

16:00～自由見学

17:00～懇親会(自由参加)

募集人数 25名(定員を超えた場合は先着順で締

め切ります)

申込期間 平成23年12月中旬の「会報」が到着した日から受付開始、人数に達し次第締め切ります。詳しくは学会HPを参照して下さい。

申込方法 件名を「鑑賞セミナー申し込み」として、所属・氏名・連絡先を明記の上、メール、またはファックスにて、跡見学園女子大学・横田恭三宛にお送りください。

メールアドレス 跡見学園女子大学(横田恭三宛)

Yokota@atomi.ac.jp

FAX番号 048-478-3416(文学部人文

学科研究室)

情報発信に向けて

(国際局)

平成23年度は昨年度ご承認頂いた「国際局の活動方針」と「国際大会の在り方」を継続しています(詳細は「会報」21号参照)。すなわち「海外で開催されるシンポジウム・展覧会など各種情報の発信」を推進し、「海外の研究者を招聘する」方向で進めており、実際には、リニューアルされた書学書道史学会ホー

ムページの「ニュース」や「国際局」の欄に情報を掲載し、招聘する研究者を調整してきました。しかし予期せぬ東日本大震災のため、情報発信が滞り、研究者を招聘できない状態に陥ってしまいました。どうか切に会員諸氏のご理解を賜りたく存じます。

今後は随時、各種の情報を発信し、国内局主催の行事にあわせて海外の研究者を招聘することも視野に入れて調整していく予定です。なお会員諸氏が参加予定の海外の会議等や、招聘研究者のリクエストがございましたら、まず国際局長(kawachic.daito.ac.jp)までお寄せ下さい。

学会誌『書学書道史研究』投稿規定の変更について

(編集局)

学会誌『書学書道史研究』第21号の編集後記でも簡単に触れましたが、次号からは編集作業の合理化・簡素化を図るため、投稿のための規定・要領を改めることになりました。

来年発行予定の『書学書道史研究』第22号に投稿

予定の会員の方々は、第21号B2ページの現行の規定・要領ではなく、学会のホームページに新たに掲載する「書学書道史研究への投稿について」の内容に則って投稿願います。どうかお間違えのないように、宜しくご確認のほどお願いいたします。

尚、学会誌の内容、あるいは編集方法等について、ご意見やご要望があれば、編集局にお寄せください。(学会ホームページへの新規規定掲載は、平成24年1月中旬にアップ予定。第22号『書学書道史研究』の原稿締切は、平成24年3月31日です。)

ジェイ・ステージの活用とその他について

① JSTAGEについて

学会誌『書学書道史研究』18号までの電子アーカイブ化完了を受け、19号以降は同じ科学技術振興機構（JST）が運営するJSTAGEに搭載することとなりました。二〇二二年四月一日に19・20号を公開する準備を進めています。以後は学会誌刊行から一年後に順次公開する予定です。

② 東洋学・アジア研究連絡協議会について

東洋学・アジア研究の連携を図るべく二〇〇五年六月に発足し、書学書道史学会を含め約四十の学協会が入会しています。政府の事業仕分けに対する、若手研究者支援事業予算削減反対の意見表明（二〇〇九年十二月、首相・文部科学大臣等宛）を行うなど、スケールメリットを活かした実績を重ねつつあります。

③ 科研費細目表の改訂について

従来は分科「哲学」の細目であった「美学・美術史」が分科「芸術学」に移され、芸術学が「美学・芸術諸学」「美術史」「芸術一般」の三細目に拡充される改訂案が発表されました。八月に実施されたワークショップやパブリックコメントも踏まえ、平成二十五年度公募から変更される予定ですが、制作研究にも配慮したことになることが期待されています。

「ジェイ・ステージ（JSTAGE）」の活用

ジェイ・ステージの運営は、文部科学省所管の独立行政法人科学技術振興機構が担っています。現在、『書学書道史研究』の創刊号から18号までは、ジェイ・ステージのサイト内のジャーナルアーカイブ（Journal@rchiv.e）で、すべて閲覧可能となっています。

（学術局）

このジャーナルアーカイブは、過去に日本語圏で発行された学術雑誌を、ネット上でPDF形式で無料公開しているウェブサイトです。また、日本の学協会が紙媒体で発行した学術雑誌の内、選定を通過したものについて、収録記事を創刊号まで遡ってデジタル化してネット上で無料公開しているサイトです。

ジェイ・ステージに登録公開されている文系学会誌は、いまだ少ない状況にあります。こうした中で、本学会のジェイ・ステージへの登録公開は、学術的に意義ある活動と言えます。会員諸氏にあつては、大いにジャーナルアーカイブをご利用いただき、各自の研究にお役立てください。

平成二十四年度「特定領域研究促進助成金制度」募集要項が出来ました（研究局）

（研究局）

す。

① 近現代書道史・近現代書学

標記制度は、研究促進及び研究基礎整備の必要性が特に求められる領域を特定し、会員を対象に、当該領域の研究計画を募集し、応募のあった研究計画から優れた成果又は有用な成果が期待できる計画を選定したうえで、研究推進助成金を支給し、翌年に成果の提出を求め、当該領域の研究促進と斯学の振興に寄与しようとするものです。

② 新出土資料

また、申請受付期間は、平成二十四年六月一日（金）～六月三日（日）です。詳細は募集要項をご覧ください。

平成二十四年度特定領域は、前年度に引き続き、大会の総会時にもご報告したとおり、次の二領域で

平成二十三年度では、新規ホームページへの移行にともない、「応募研究計画書様式」の入手方法を変更するなど、ご不便をお掛けしましたが、平成二十

四年度の「応募研究計画書様式」からは、ダウンロードにより入手可能となりました。奮ってご応募ください。

書学藻塩草

行成の「夢」―『権記』の記事をめぐる―

古谷 稔

藤原行成（九七二―一〇二七）といえば、平安時代中期に活躍した小野道風・藤原佐理とともに「三跡」の能書として書道史上あまりにも有名である。この行成が、権大納言に至ったため、その書は（権跡）とも称し、また日々綴った日記は『権記』と呼ばれ、当時の歴史史料として貴重である。その長保五年（一〇三三）十一月二十五日の条に、

二十五日辛亥、参内、東宮に参り、目染め（しぼりぞめ）の裳を返上し、弾正宮に詣る。この夜、夢に野道風に逢う。示して云う。書法を授くべし、と。雑事を言談す。（原漢文）

とあり、小野道風が行成の夢枕に立ったという。行成が『権記』の中で道風と出会った夢を記すのはこれが唯一である。道風は康保三年（九六六）に没し、行成はその六年後の出生であるから両者が邂逅することはありえない。では、何ゆえにこのような夢を見、それをわざわざ日記に書き留めたのか。こうした疑問が生ずるのは稿者だけではない。

夢枕に立った道風がどのような風貌であったか知る由もないが、たとえば現存する伝頼寿筆小野道風画像（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）は時代が降った中世の作とはいえず、書法を伝授する姿とすれば、それに近い執筆の情景が推察される。じつは、本稿では道風像はさほど問題でなく、むしろこの夢を引き起こした行成の心的状況に興味津津たるものがある。

長保五年といえば、行成三十二歳の働き盛りである。道風に代わって宮廷書道に牛耳を執っていたのは他ならぬ藤原佐理（九四四―九九八）である。じつに道風没後三十二年間、その主役を引き受けたのは佐理で

あった。たとえば行成十三歳のとき、僧・喬然らが渡宋し、佐理の手書二巻を太宗皇帝に献上した記録が『宋史』に出ている。また、現存する佐理の自筆書状「離洛帖」（崑山記念館蔵）は佐理四十八歳の筆であるが、行成はまだ二十歳の青年であった。一方、宮廷の能書としてもっとも重要な役割は、天皇即位後の大嘗祭における悠紀主基屏風色紙形の執筆を奉仕することで、一世一代の荣誉とされた。佐理は円融・花山・一条の各天皇即位に際して筆者に選ばれており、道風・行成もそれぞれ二度の荣誉を手中にしている。

話は戻って、前掲、長保五年は佐理がこの世を去って五年後のこと。行成は日々、宮廷の書き役として最高の立場に据え置かれた。では、「夢」で書法の伝授をうけたのは佐理からでなく、何故、道風であったのか。

それは道風が在世中から宮廷で圧倒的に人気が高く、「羲之再生」と、高い評価が与えられ、中国書法に創意工夫を加えた日本的な美意識を踏まえたもので、道風没後に成立の『源氏物語』（絵合）では「今まかしう、をかしげに目も輝くまでみゆ」と、新鮮味ある現代的な書と受け止められていた。それが（和様）であり、道風はその開祖として容認されていた。それは佐理にも影響を及ぼしたものの、行成は佐理の活躍を脇目に、伝統的な道風様を前向きで学び、同時に道風が基盤とした王羲之書法にも注意しながら漢字書道に励み、当時流行した『白氏文集』の書写を中心に洗練された王朝の美を確立した。その代表作の一つに、行成四十七歳の筆「寛仁本白氏詩卷」（東京国立博物館蔵）がある。その巻末あたりに眼を遣ると道風様を気付けさせる書風が窺える。

行成が目指したのは、道風の模倣でなく、香り高い書法の開発にあった。身辺で道風自筆本を自ら手に取って愛読した事実は、前掲、『権記』のほか、生涯の盟主・藤原道長の日記『御堂関白記』などに見え、そうした道風自筆本の息吹が、行成に「夢」を誘ったのではあるまいか。

視点

世代交代と研究方法

笠嶋 忠幸

第22回書学書道史学会は、大東文化大学を当番校として開催された。たいへん盛会であった。研究発表の内容も多彩で、ジャンル間を横断する発表が含まれていたことも、今年の特徴であったように思われる。特設の作品展観も見応えがあり、参加者たちの笑顔がとても印象的であった。

ところで世情は、どの分野の研究現場でも世代交代が進みつつあるようだ。斯界でも徐々に研究者の若返りが進んでいることは、周知のとおりである。それに伴って、研究にあたっての方法論についても、やや感覚的な世代交代が見受けられるようになってきた。そのような事情を反映するかのように、近年では大会での発表題目や内容が、様相を変えつつある。さまざまな他ジャンルの方法論を援用したり、これまでになかった斬新な観点を持ち込んだりしながらの発表内容は、とても興味深い。いずれもこれから試行錯誤を繰り返しながら、研究の未来は切り拓かれてゆくのであろう。

しかしその一方で先輩陣からの大事な提言を、後進の者は軽く見過ごしてはならないと、私は今回の大会でこころから強く思ったのである。それは、古谷稔前会長の貴重な一言にある。「モノからはじまる研究」、そして「モノが見えてこそその研究」。これに尽きるだろう。近年の研究

発表形式が、実に理論偏重になってきていることを、やさしく一蹴するような一言であったのではないだろうか。

そもそも書学書道史の学術的理論とは、モノと共に丁寧に分析されて、そして語られてこそ意味がある成果をなすと言えよう。日中を問わず、書論の研究では精力的かつ仔細な分析が進んでいる昨今の状況下、一方では、その評論とともに語られるべきモノが、一部置き去りにされつつあると感じられることも少なくない。さらにデジタル優先の社会が横行してゆく風潮の中、ネット上でもクオリティの高い画像が勝手に氾濫し、いとも簡単に手入できてしまう。そうとなると、人の感覚、とりわけ視覚的判断力の正確さや緻密さへも大きな影響が出て、結局、研究者たちの基盤は弛緩していつてしまうのではないだろうか。

美術史学の研究現場においては、作家の言説ほど疑わしきものなしという共通理解が常識である。作家本人はそう思って活動していても、社会の客観的評価とその作家の言説は必ずしも一致するとは限らないということだ。無論、両者の方向性が「なるほど」と納得のいく場合もあるだろう。このような状況を、可能な限り徹底して議論は進めたい。研究方法の細分化がある程度進んだ今、研究者たち各々は、今一度、身辺をふり返っておくべきであらう。各々が多角的な観点を持ち寄ることで、より客観的な見方、捉え方、考え方ができるようになる。さらには、モノのどのような特徴に理論上の成果が見いだせるかを、徹底的に議論すべきであらう。もちろんそこに先輩・後輩の区別などあつてはならない。率直に、真剣に語り合つてこそ、実証的研究の楽しさと充実は生まれるのだから。

平成22年度会計決算報告書	
項 目	金 額
個人会員会費	2,307,000
団体賛助会費	500,000
その他の収入	414,334
前年度繰越金	4,543,238
合 計	7,764,572
20周年事業特別会計	1,000,000
編集局学会誌関係費	908,960
国際局経費	0
国内局経費	376,152
学術局経費	0
研究局経費	0
《会報》編集委経費	170,900
ホームページ委経費	483,000
事務局経費	
謝金手当	0
会議費	29,671
荷造送料	101,460
交通費	197,700
普及広報費	0
印刷費	28,413
通信費	0
事務消耗品費	0
事務委託費	360,000
人件費	30,580
諸会費	2,000
次年度繰越金	4,075,736
	7,764,572

平成23年度会計予算書	
項 目	金 額
個人会員会費	2,400,000
団体賛助会費	600,000
その他の収入	600,000
前年度繰越金	4,075,736
合 計	7,675,736
編集局学会誌関係費	1,200,000
国際局経費	300,000
国内局経費	600,000
学術局経費	200,000
研究局経費	500,000
《会報》編集委経費	200,000
ホームページ委経費	200,000
事務局経費	
謝金手当	200,000
会議費	300,000
荷造送料	300,000
交通費	400,000
普及広報費	100,000
選管費	200,000
印刷費	300,000
通信費	0
事務消耗品費	0
事務委託費	360,000
人件費	200,000
諸会費	10,000
予 備 費	2,105,736
	7,675,736

- 去る11月12・13の両日、大東文化
 大学板橋校舎1号館で開催された「第
 22回大会」の冒頭、例年通り本年度
 総会が開催された。
- 総会は、大野修作理事の司会で、
 まず横田恭三国内局長の開催の辞、
 太田政男・大東文化大学学長による
 開催大学代表挨拶、大橋修一理事長
 の挨拶に続き、荒金信治諮問委員を
 議長に選出して議事に入り、以下の
 議事審議が行われた。
- ▽22年度事業報告
- 会計報告(鈴木晴彦事務局長)
- ▽22年度監査報告(杉浦妙子監事)
- ▽編集局報告(高城弘一副局長)
- ▽学術局報告(森岡隆局長)
- ▽国際局報告(河内利治局長)
- ▽国内局報告(横田恭三局長)
- ▽研究局報告(澤田雅弘局長)
- ▽会報委員報告(柿木原くみ委員長)
- ▽23年度事業計画
- 予算案説明(鈴木晴彦事務局長)
- ▽その他の各議案・報告等
- 以上、いずれも満場一致で承認・
 可決し、すべての議事を終えた。

褚遂良の同州左遷について 荒金 治

『旧唐書』・『新唐書』の「高宗本紀」・「褚遂良伝」には、「坐事」と記されており、具体的な理由は記されていません。一方で『資治通鑑』や『唐会要』には、中書令の褚遂良が部下（中書詠語人）の土地を易く購入したという左遷の原因があり、『旧唐書』・『新唐書』においてもそれを摘発した人物の「韋思謙伝」には記載がありました。北京大学留学中、榮新江教授に話をすると、中書詠語人の史訶耽の墓誌の拓本を見せてくれました。同時に羅邦氏の『固原南郊隋唐墓地』（文物出版社）に掲載されていることも知らされ、史訶耽という人物像がくつきりと浮き出てきました。北京大学では、歴史系に本科と修士あわせて八年在学しましたが、書道史をするにあたって、歴史学の中に含まれる多くの資料に触れる必要性を学びました。

古典籍展観大入礼会 高峰

11月11日、神保町古書会館にて開催された古典籍展観大入礼会の下見会に行ってきました。今回は東京古典会の創立100周年記念の意味もあり、図録も例年より厚くなっていました。期待に胸を高鳴らせて、会場へと足を運びました。ここ数年各研究機関の研究者や中国のオークション関係者は、入礼会で目立つようになり下見会を賑わせています。今年も珍品がずらりと並べられていて、大変勉強になりました。個人的に特に印象深かった品は以下の通りです。富岡鉄斎手沢本の『有正味齋全集』（嘉慶13年刊）、長尾雨山手沢本の『首首唐人絶句』（萬歴34年刊）、『徐乃昌蒐集古璽印選』の貼り込み帖（陳介祺・黄賓虹・袁寒雲等の書き込みがある）、須田剋太筆仏像関係の色紙や下絵十数枚。

古筆鑑定法あれこれ 中村健太郎

先日、聞香の席で後西天皇の勅銘香「室八嶋」を開かせて頂く機会があった。床には後西天皇の御宸翰を掛け、まさに近世の禁裏文化を現代に再現する試みである。江戸時代の古筆見が、鑑定にあたり衣服を改め、手水で手口を清め、香を炷いて臨んだという史料も想起され、伝統的な鑑賞方法を追体験する得難い経験となった。香木と古筆切は、銘が付けられ分割されて行く点や、鑑定方法など共通点が多い。古筆切は書流で、香木は六国五味で分類し、さらに上上から下下まで九品の格付けで個々を細分化して判別する。近代以降の学問としての古筆研究の重要性は誰しも認めるところではあるが、一方でこうした伝統的な鑑定方法の体系とはいかなるものであったのか、古筆の鑑定や鑑賞、伝称筆者の問題など、探究する楽しさは尽きることがない。

展示解説と話し方講習 中村信宏

台東区立書道博物館では、中村不折コレクションによる企画展・特別展の会期中、当館主催も含め、事前申し込みの団体を対象に展示解説を行っている。最近それらを担当する機会が増えてきたが、人前で話すのは難しい。生来のあがり症で記憶が飛ぶこともあったが、お客様の温かい励ましで徐々に改善できたつもりでいた。ところが先日受講した話し方の講習で、録画された自分の姿を見た。視線が虚ろで、自信のなさが全身から表れた話し方であることがわかり、愕然とした。今後はこの癖を直し、上司や他館の先生方の解説を参考にして、お客様により満足して頂ける話し方に変えていかなければならないと思っている。しかし、不折と同姓であるがゆえに、まさか子孫では、という誤解を解く前口上だけは、今のところ変えられない。

新入会員(2013.11.10)

- 荒金治(24) 大学非常勤講師
- 大内基康(22) 筆の里振興事業団参与
- 小川靖彦(28) 大学教授
- 板橋聡美(24) 大学非常勤講師
- 学)伊雄暉(1987)
- 学)内記智仁(26)
- 学)三澤真帆(23)
- 学)鍋倉翔織(23)
- 学)廣田ゆう(23)
- 学)岡部容枝(21)
- 学)川本茜(21)
- 学)渡邊亮太(21)
- 学)中島市子(23)
- 学)山根尚恵(23)
- 学)星子桃子(23)
- 学)権田瞬一(23) 高校講師
- 学)大野幸子(23) 高校講師
- 学)芝垣博之(23) 高校教諭
- 学)武井志歩(22)
- 学)安生成美(23)
- 学)野田悟(25) 大学助教
- 学)中川みわ子(26)
- 学)西山優(23)
- 学)廣島章子(23) 高校教諭
- 学)福光由布(27)
- 学)古田省伍(23)

編集後記

◆今秋の日展・物故作家のコーナーの作品が例年より多いように感じた。中に今井凌雪先生の作品も並んでいた。今度の日曜日、筑波大学アーツスペースで開催中の「今井凌雪遺作小品展」を參觀予定である。筆者は雪心会中道春陽先生の門下であるので、今井先生の孫弟子という縁であった。(紫)

◆昨年の会報委員担任より、本紙の編集作業は四度目となりました。会議では、事務局長並びに委員長から作業の手順を教わりながら、本会の沿革や運営等に関するお話も聞かせていただいております。設立から二十余年の歳月に思いを馳せつつ、今回も業務に当たらせていただきました。(六人部克典)